

武蔵野日曜集会

無一

——エペソ書第4章——

1992年2月2日（武蔵野）

小池辰雄

キリストの囚人 自我の関門 御霊の一致 一即全 神の現象体 絶対恩恵関係 聖霊のパプ
 テスマ 共在・實在・遍在・内在 十字架と聖霊は不可離 無一 絶対の世界 新しき人 一
 如体認

【エペソ4】

1 されば主に在りて囚人たる我なんじらに勧む。汝ら召されたる召に適い
 て歩み、2 事毎に謙遜と柔和と寛容とを用い、愛をもて互に忍び、3 平和の
 繋のうちに勉めて御霊の賜う一致を守れ。4 体は一つ、御霊は一つなり。汝
 らが召にかかわる一つ望みをもて召されたるが如し。5 主は一つ、信仰は一つ、
 バプテスマは一つ、6 凡ての者の父なる神は一つなり。神は凡てのものの上
 に在し、凡てのものを貫き、凡てのものの中に在したもう。7 我等はキリス
 トの賜物の量に随いて、おのおの恩恵を賜わたりたり。8 されば云えることあ
 り『かれ高きところに昇りしとき、多くの虜をひきい、人々に賜物を賜えり』
 と。9 既に昇りしと云えば、まず地の低き処まで降りしにあらずや。10 降りし
 者は即ち万の物に満たん為に、もろもろの天の上に昇りし者なり。11 彼は
 或人を使徒とし、或人を預言者とし、或人を伝道者とし、或人を牧師・教師
 として与え給えり。12 これ聖徒を全うして職を行わせ、キリストの体を建て、
 13 我等をしてみな信仰と神の子を知る知識とに一致せしめ、全き人、すなわ
 ちキリストの満ち足れるほどに至らせ、14 また我等はもはや幼童ならず、人
 の欺騙と誘惑の術たる悪巧とより起こる様々の教の風に吹きまわされ
 ず、15 ただ愛をもて真を保ち、育ちて凡てのこと首なるキリストに達せん為
 なり。16 彼を本とし全身は凡ての節々の助けにて整い、かつ聯り、肢体おの
 おの量に應じて働くにより、その体成長し、自ら愛によりて建てらるるなり。
 17 されば我これを言い、主に在りて証す、なんじら今よりのち、異邦人の
 その心の虚無に任せて歩むが如く歩むな。18 彼らは念暗くなりて、其の内な
 る無知により、心の頑固によりて神の生命に遠ざかり、19 恥を知らず、放縦
 に凡ての汚穢を行わんとて己を好色に付せり。20 されど汝らはかくの如くな



らん為にキリストを学べるにあらず。²¹ 汝らは彼に聞き、彼に在りてイエスにある真理に循いて教えられしならん。²² 即ち汝ら誘惑の慾のために亡ぶべき前の動作に属ける旧き人を脱ぎすて、²³ 心の霊を新たにし、²⁴ 真理より出づる義と聖にて、神に象り造られたる新しき人を著るべきことなり。

²⁵ されば虚偽をすてて各自その隣りに実をかたれ、我ら互に肢なればなり。

²⁶ 汝ら怒るとも罪を犯すな、憤恚を日の入るまで続くな。²⁷ 悪魔に機会を得さすな。²⁸ 盗する者は今よりのち盗すな、むしろ貧しき者に分け与え得るために手づから働きて善き業をなせ。²⁹ 悪しき言を一切なんじらの口より出さな、ただ時に随いて人の徳を建つべき善き言を出して、聴く者に益を得させよ。

³⁰ 神の聖霊を憂いしむな。汝らは贖罪の日のために聖霊にて印せられたるなり。³¹ 凡ての苦・憤恚・怒・喧騒・誹謗、および凡ての悪意を汝等より棄てよ。

³² 互に仁慈と憐憫とあれ。キリストに在りて神の汝らを赦し給いしごとく汝らも互いに赦せ。

●キリストの囚人

今日はエペソ書の第4章です。

主に在りて囚人たる我

という。この「囚人」という言い方は滅多に出てこないが、「デスミオス」という字です。パウロは、ローマでとつ捕まって、牢屋に入れられているわけですが、彼が本当にとつ捕まっているのは、キリストであつて、キリストの中に入れられている。これが、このパウロの言う「囚人」なんです。我々も、その意味において、キリストの囚人にならなければ、本当の力が来ない。「囚人」というのは嫌な言葉ですけども。

人間は、実は自己に囚われている。「我執」、これが「罪」ということ。自己にとらわれている、エゴイストなんです。ところが、自己にとらわれていたのでは、いつまでたつてもダメで、日本の「民主主義」なんていうものは、「自己囚われ主義」みたいなものです。相対的なものにとらわれている限りはダメなんで、絶対的なものにとらわれる、これがパウロの言う「囚人」です。

「絶対的なものに囚われている」

ということとは、

「本当の自由を持っている」

ということ。自己に囚われていて、「自由、自由」なんて言っているのは、ひとつも自由ではない。それは勝手気儘というやつで、勝手気儘とこの聖書の云う自由とは大違いです。

パウロさんは自分を囚人と言ったけれども、

「パウロはそうだけれども、我々はそうじゃない」



なんて、そう思ったらダメですよ。我々自身も正に、キリストの囚人^{めしうど}です。それが徹底すれば、大したことですがね。

仏教の世界だってそうですよ。みんな、

「本当の生きた真理に囚われていることが本当の自由だ」

ということ。我々の肉体も囚われている。これは何にとらわれているか？ 空気にとらわれている。空気に囚まれ、空気を吸って、空気なしには生きていられない。これは「気」の世界。今度は、「霊気」の世界。キリストの霊気にとらわれている。キリストの霊気を吸っていれば、こんな生命は他にない。空気と霊気。肉体は空気を、魂は霊気を吸っている。

「霊気を本当に吸ってなければ、私は生きていられません」

というのが、本当なんだ。「囚われ」という一つの言葉をとつても、大真理がその中にある。今の一般の人たちは、「囚われ」なんていう言葉は大嫌いでしょうね。ところが、「囚われ」こそ本当の自由だ。これは、マルチン・ルターが『クリスチャンの自由』で言っている。

●自我の関門

そうなれば、もう自己がないんですから、

「謙遜と柔和と寛容とを用い……」

と、パウロはいろいろと道徳的なことをよく訓戒しているが、

「パウロの訓戒は、もうこちらは要りません」

と言いたいくらいだ。「謙遜と柔和と寛容とを用い」なんて、

「はい、謙遜ならざるを得ません、柔和ならざるを得ません、寛容ならざるを得ません」

と、そういうように答えればいいので、これを一つの徳目として一生懸命でやろうなんて思ったら、反^{かえ}ってダメなんだ。福音というものを、そういうような角度からとらえないと、苦しくてしょうがない。「謙遜」の反対は「傲慢」でしょ。自己に囚われていると、傲慢になる。柔和でもなくなる。寛容でもなくなる。

「自己に囚われない」

ということは

「自分を問題としない」

ということです。自分なんて者は問題でない。「内村鑑三」なんて、一日に「三度鑑^{かがみ}みる」なんて、内村先生の名前はひとつもよくない。「鑑三」なんていうのは儒教から来ている。省みてはいけないとは言ってますよ、もちろん。結構ですけれども、

「省みよなんて言われる必要はありません。自分なんてものには愛想をつかしていませんから」

というわけだ。



「謙遜、柔和、寛容」はみんな、要するにある一つの内容です。それを三つの言葉で言っているだけのなし。それは結局「愛」です。

愛をもて互いに忍び

と。相手に対する愛、思い遣り、「恕」です。要するに、

「孔子の教えは恕なるかな」

という。おもいやりです。孔子や孟子が言っている「仁」です。

「仁は道なり。仁は人なり」

という。孔孟の教えは、私たちは散々中学から教わってきた。「論語」「孟子」。今、おもしろいですよ、「論語」や「孟子」を読むという。福音の、キリストの光で読んでみると、楽しい。何しろ、キリストの光によったら、何でも本当に認識できる。また、それがちゃんと呑みこめる。それをまた伸ばすことができる。

一つの徳目として考えて、一生懸命でやろうとすると、くたびれる。それがいわゆる「道徳」の世界。だから、道徳では、どうしたって終いにはくたびれて、行き詰まってしまう。

「もう、道徳には愛想をつかして、私はやめました」

と、藤井先生もそう言っていた。

「結局、ダメだ。いくら努力してもどうにもならん。自分に呆れました」

と、こういうわけだ。「努力が悪い」とは言ってませんよ。相対的には、みんなそれで結構です。しかし、それでは本当の世界には入れない、というだけの話。先ず始めは一生懸命でやってみるんだよ、そうすると、みんな行き詰まって、

「ああ、われ悩める人なるかな」

と、パウロが言っているとおり、

「この死の体より我を救わんものは誰ぞや」

と言って、倒れてキリストの中へ入っていった。仏教の世界でも、みんなそうです。その関門は、要するに、「自我」の、「我」の問題です。「我」があるうちはダメなんです、「無我」にならないと。

●御霊の一致

今日は標題に「無一」と書いた。「無一」という言葉はないんだ。「無一物」という言葉はある。字引を引っ張っても、「無一」という言葉は出てこない。私が今日初めて造った。後で何のことだか申しますけれども。とにかく、集会毎に何か新しいものが出てくるから、不思議でしょうがない。

3 平和の繋のうちに勉めて御霊の賜う一致を守れ。

「勉めて」なんて、余計なこと言わなくていい、ダメだよ、パウロさんは、そんな言い方したら。御霊が本当にくれば、一致ならざるを得ないのに、



「つとめて一致を守れ」

なんて、パウロは余計なことを言っている、パウロの言い方は間違っている。こんなことを言う牧師さんはいないだろうね、おそらく。私は、聖霊の世界にいるから、はっきり言えるんです。

パウロがこんなことを言うものだから、みんな、しゃっちよこばってさ、

「パウロがこう言ったから、一生懸命でやりましょう」

なんて、ご苦労さまだよ。皆さんも、そうでないですか。くたびれてはダメだよ。私はくたびれないんだ。何をやってたって、くたびれない。楽しくてしょうがない。力が来てしょうがない。

私は、そこの牧師さんたちと違うんだから、はつきり。何も、牧師さんをけなししているのではない。私みたいに自由に言うやつはいない。牧師さんたちが驚いているんだから、私の話を聞いて。専門の牧師さんたちが、素人の私にかなわない。私が偉いんでも何でもない。聖霊が凄いから。

「御霊の一致ならざるを得ません。一致を守れなんて、守ろうと致しません。一致

ならざるを得ませんから」

と、パウロにそう言ってやればいい。

この武蔵野召団は、御霊の一致で行っています。人間的な欠陥はそれぞれあります。そんなことは、いいですよ。十字架・聖霊の処にきたらもう、一つならざるを得ない。くだらない事を言ってられない。十二召団が本当にそうならば、そうだけれども、そうでないという、段々抜けていくよ。抜けて行くのは、自分を裁いているだけのなし。

私は勝手なことを言っているようだけれども、本当は名刀なんです、これ。この名刀の切れ味が分かるか、というんだ。いいですね。

●一即全

⁴ 体は一つ、御霊は一つなり。汝らが召にかかわる一つ望みをもて召された

るが如し。⁵ 主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、

パウロはここで、「一つ、一つ、一つ」と言っている。そんなことを言われると、

「さあ、大変だな、一つになるには。一つの信仰といたって、なかなか大変だなあ」

なんて思う。

「何故、パウロは、こんなにゴタゴタ言うんだ」

と。ゴタゴタと言ったら悪いけれど。

体はみんな一つだ。指一本切られても、血が出て死んでしまう。身体全体のどの部分も、有機的な生命の世界は、一なんです、同じなんです。それが、

「一即全」



ということ。一部分は身体全体と一つである。あるいは、「一即多」という言葉もある。西田哲学がそうだ。

「一即多、多即一」

という。K君という一人のひとがいる。それは、

「私は東京召団です」

ということが言える。その「一」が「全体」を表している。あなた方一人一人がそうなんです。そういう「一」でなければ、この「全体」と一つではありえない。「一」というのは「即全」でなければいかん。指一本が、私の身体全体と一つなんです、同じなんです。これを切られると、血が出て死んでしまう、血を止めない限り。脈を切られればそれで死んでしまう。それだけ、血が流れている。一つになっているものは血なんだよ。だから、

「血は即ち生命のあるところなり」

と、創世記の9章に書いてある。我々に於て、「一つ」の生命は、この聖霊なんです。

聖霊があれば、パウロが言っているこの「一」が全部わかる。全部、つかめる。キリストの霊です。大分早く、結論を言ってしまったけれども。

主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、

みんな、一つだ、他にはないんだと。「神は一つ」ということは、

「それが絶対の中心だ」

ということ。他の民族の神々もありますよ、旧約聖書で書いてある。だけれども、

「イスラエルにとってはエホバの神だけなんだ。これだけが本当の自分の神なんだ」

と。これが「一対一」の関係です。とにかく、ユダヤ人がもの凄く力を持っているのは、そういう信仰のところにいるから。これが排他的になって、うまくないところがあるけれども。その排他的になっているのは、本当の意味で、

「エホバの神さまは全世界の神である」

というところまで行っていないから。預言者になると、それを突き抜けている。全世界の神です。

「他の民族神はあるけれども、ケタが違う、次元がちがうぞ」

ということ。民族神を否定しているのではない。あまてらすおおみかみ「天照大神」は結構です。けれども、

全世界の、宇宙の神。それは、鬚をはやしたお爺さんでも何でもない。人間が想像できない。だから、

「神は相がない」

と言っているでしょ。すがた相が無い、「無相」だと。相の無い、霊的な実在者、神。それを「相」に表したのがイエス・キリストです。



● 神の現象体

キリストは、

「我を見し者は父を見しなり」

と言った。全世界の神のことを「父」と言っているんだから、キリストは。「お父さんの子」なんて言ったって、それはひとつの人間的な言い方で、「父よ」と言う。仕方がない、そういう表現でしか、親しみが出てこないものだから「父よ」と言った。「神よ」とあまり言わないんだ、キリストは。

「我が神、我が神」（エリ、エリ）

という言葉も、それは詩篇から持ってきて、十字架上で言っではいますけれども。要するに、「我を見し者は父を見しなり」とは、キリストは父の出店なんだ。現象体なんです。このバラの花は、

「我を見し者は太陽を見しなり」

というのと、同じことだ。太陽の光でもってできているんだから。ひまわり草なんて一番それをよく表している。ゴッホが好きだった向日草。^{ひまわり}

本当に

「主は一つ」

だというと、それに抛り頼まざるを得ないから、

「信仰は一つ」

にならざるを得ない。いいですか。

「信仰とは自分の信念だ」

なんて思ったら、大間違い。

「受けとらざるを得ない」

というのが信仰なんです。キリストという、驚くべき神の現象体を受けとらざるを得ない。お釈迦さんは、だんだん悟ったんだけど、キリストは初めっからなんだ。ケタが違うと言っているでしょ。神の現象体であるところのイエス・キリストに、いくら坊さんたちがかかっていったってかなわない、この12才のキリストに。

そうしたら、我々の望みも、もうキリストにだけかかっているから、「一つ」。キリストの他に、私たちの望むところのものはない。信ずる相手でもあるし、望む相手でもあるし、愛する相手でもある。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、主なる汝の神を愛すべし」

と、キリストが言っただけでも——これは旧約にある言葉だけれども——「愛すべし」ではないですよ。

「キリストの愛に圧倒されているから、愛せざるを得ません」

というだけの話です。圧倒されているんだ、キリストに。私は、キリストがなければ、生



きていられない。

●絶対恩恵関係

あなた方、時々、著作集の第9巻（『感想と紀行』1987刊）を読んでもくださいよ。第9巻に、「キリストと私」（17頁）というのがあるでしょ、あそこの所を。この著作集全十巻というのは、自分で私は

「へえ、こんな事を書いたか」

なんて、今ごろになって正直、驚いているんですよ。

「まづ合掌してから筆を執った。こういう標題があるかと人は問うにちがいない。ところがあるのだと主が応えてくださる。

過越の祭の前、最後の晚餐を迎えるに当たり、イエスは弟子どもの足を洗い給い、ペテロの番がきた。すると彼はイエスに洗足されては勿体ないと思って、

「断じていつまでもわが足を洗い給わされ」

と言った。これに対してイエスは

「我れもし汝を洗わずば、汝われに関わりなし」

と返答された（ヨハネ13・8）。即ちキリストの洗足にはペテロの存亡に関わる重大な意味があった。

「キリストと私」という関係は、洗足関係であって、キリストの方から本願の行為を以て関係つけ給った絶対恩恵関係であるので、「主が答えてくださる」と書いたわけである。……」

キリストの方から、

「お前の足を洗わなかったら、私とお前は関係ないぞ」

と。というのは、

「私たちの罪を贖わなかったら」

ということですよ。

「お前たちの自我を完全に私は引き受けたから。相変わらず自我があっても、そんなことは心配するな。私を見ろ」

と。いわゆる、こつちからの「信仰」ではない。「信念」でもない。キリストの愛に圧倒される。

「太陽の光に圧倒されて生きている」

と、こういうわけです。太陽の光がなかったら、どうにもならない、みんなエラそうな顔しているけれども。だから、私は太陽を拝んでいる人は本当の世界にいるなあと思う。神さまの栄光の現れは太陽だからね。

その太陽を非常に好きだったのは、ドイツの詩人ゲーテです。



「自分は太陽の子（ゾンネンキンツ）だ」

と言った。日本の国旗は太陽ではないですか。その国旗をいい加減にしているんだ、日本人は。亡びてしまうぞ。私は、だから、元日、二日、三日と、国旗を掲げっぱなしだ。

「あの野郎、気違いか」

「お前たちと違って、気が違っていろぞ」

と。それくらいの意気込みを持って——国旗を掲げなくなつていいよ——自分自身が国旗になればいいんだ。太陽を胸に持つていればいい。

「心に太陽を持て」（ハープ ゾンネ イム ヘルツェン）

という。いや、

「汝自身が太陽であれ」

ということだ。キリストを受けとると、太陽になつてしまうんだ、こつちが。日本の国旗になつてしまう。

「国旗はどこにあるか」

「ここにあり、我なり」

と、あなた方が言える。それだけの気迫を持つてくださいよ。

●聖霊のバプテスマ

「バプテスマは一つ」

これは、聖霊のバプテスマです。それは水を垂らすのではない。霊を賜る。私は、阿蘇の山の中でこの聖霊のバプテスマを受けた。これは決定的なものでした。それからですよ、私のはつきり変わってしまったのは。なにしろ、天界から光がきて、ぶつ倒されて、身体がちよつと浮き上がったりして、全身が痺れてぶつ倒れてしまった。

「あつ、これが聖霊のバプテスマか」

と。帰りの汽車の中で、聖書を読んだら、聖書のベールがとれてしまった。楽に読めるようになった。

「なるほど、こういう次元にこなければ、聖書は読めないんだ」

と。だから、

「聖書研究会なんて、いくらやつたつて、くたびれるだけです」

と言っているんだ。「研究が悪い」とは言っていないよ。外側のことは分かるでしょう。しかし、研究で聖書の世界はつかめない。

「降参しろ、聖書はドラマだから。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ伝を読んだら、キリストというドラマの主体、主人公の前で、「参りました！と降参すると、その世界に入れるぞ」

と。何回言っているか分からない。あなた方は耳にタコができるくらい聞いている。しかし、



本当の真理は、「2+2=4」という数学の真理と違う。常に新たに魂にひびくものなんです、何度言われても。「またか」なんて聞いているうちはダメですよ。毎回、感激して聞いている。私は感激して、ものを言っているんだからね。マンネリズムでものを言っているのではない。言わざるを得ずして言っているんだ。

それだから、パウロが言っている、「一つ、一つ」というのは、もう楽に受けとれるでしょ、「ああ、その通りでございます」と。

● 共在・貫在・遍在・内在

6 凡ての者の父なる神は一つなり。神は凡てのものの上に在し、凡てのものを貫き、凡てのものの内に在したもう。

これは、私は大好きな言葉です。神は遍在します、どこでも居られる。共在、貫在、遍在、内在。空気がその通りだ。「汎神論」でも何でもない。すぐ、こういうことを言うと、

「あれは汎神論で、パウロはこれを本当に書いたか」

なんて、下らないことを言う。いわゆる頭の神学をやっているのはそんなことを言いたくなる。私の神学はそんなのじゃない。超神学の神学だから、私は認められないんだ。だから、「組織神学」から出てしまった。何しろ、しょうがないね、私は例外になってしまった。「小池」は天下に一つなんだ、やっぱり。しょうがない。「しょうがない」と言うよりしょうがない。この気持は、あなた方自身がない。

「そうだ、その通りだ」

と思う人は、あなた方一人一人がそういう人間になる。例外者だ。逆に言うと、本当の例外者は一切に通ずるんです。キリストという例外者は万人に通ずる。キリストは全く「例外」(アウスナーメ)なんだ。天上天下、東西古今、唯だ一人のひと。それが実は、歴史を通して、また万国のどの人に対しても、楽に入ってくるひとなんだ。これが福音の世界だ。

まだ、区別しているうちはダメなんだよ。そういうことが芸術の世界で分かっているのは、柳宗悦です。柳宗悦は素晴らしい。あれは、宗教と芸術の世界は本当につかんでいるね。学者の中では、京都大学の宗教哲学の西谷啓治(1900～1990)は素晴らしい。あの人の書いたものは私は好きだね。それから、西田先生。もう、第一級のものでなければ、相手にならない。

一切に超在し、内在し、貫在し、遍在するところの、無相の神。それが霊の世界なんです。その神・キリストと一つになるためには、自分が「無」でなければダメです。小さな「小我」が生きていたらダメなんだ。さっき言った無我にならなければ。我が無い。この「無我」は自分でなれない。これは、十字架が私たちを無我にしてくださった。

「お前の我執は全部、引き受けたよ」

これが、「十字架の贖罪」ということです。



●十字架と聖霊は不可離

何も禅宗的に、無に悟り澄ます必要はない。坐禅なんかいらぬ。私は、禅宗の坐禅をけなすわけではないが、ご苦労さんですと言いたくなる。私はキリストに圧倒されて、私の中心は何も無いんです。相対的な人間「小池」は罪びとにすぎません。けれども、その奥には、もうそんな我執からぬけているところの、無我の、罪なき根源の現実をいただいている。これが、「絶対恩恵」というものです。そこには、聖霊がやってくる。

一般に、ただ「十字架、十字架」と一生懸命で十字架の贖罪という「観念」を信じているんだ。ダメだよ、それでは。私も、永いこと無教会で、観念的だった。「全部、観念だ」とは言わないけれども、「かなり来た」と思うこともあるけれども。

けれども、本当に平伏して、祈り込んで、キリストの中に全身を投げ入れることが「祈り」なんです。そうすると、この「無我」を頂戴する。

「お前は、もう相対的な自分なんてものは問題にするな。一番大事な、無我の、我を越えた世界をお前の中にやったぞ」

と、これが十字架の恩寵です。そうすると、

「私は、その十字架を通ったら、必ず聖霊をやるんだ。待っている」

と。これが、キリストの歴史だったではないですか。

「この火、聖霊の火が燃えたらんには、何をか要せん。けれども、受くべきバ

プテスマがある。それは十字架に懸かることなんだ。十字架にかかってお前

たちの罪を贖ったら、聖霊が望んでくるぞ」

という、ルカ伝12章49、50節のあの言葉は非常に大事な言葉なんだ。キリストの言葉の最も大事な言葉といつてもいいくらいだ。パウロも、そのところははつきりは言っていないね。十字架が土台で、それから、本当に聖霊が来るので、パウロは逆だった。聖霊に撃たれて、それから十字架が分かった。ま、いいよ、逆でも。けれども、構造からいえば、十字架が先なんです。このキリストの十字架が先なんだ。それから、聖霊が来たんだから。逆でも何でもいから、とにかく、本当のその世界を、十字架と聖霊が不可離の、離れざる関係にあるということを、はつきりと、全存在で受けとっているか。それが、

「信仰は一つ」

の「一つ」なんです。その他に本当の信仰はない。パウロが「信仰は一つ」というなら、私に言わせるなら、そういうことなんだ。

●無一

だから、「無」の世界に入ると、本当に「一」の世界に入る。この「一」というのは、「神さまは一つ、主は一つ、バプテスマは一つ」と、そんなことを言わなくなつて、これ(無)と「一つになる」ということです。「無一」の「一」は、「一如」のことです。無に入ると、



無を土台にすると、本当の一如の世界に入る。「無一」とは「無一如」ということだ。この「無一」は「無一物」ではない。私が今日造った特別な熟語です。無を土台とした「一」の世界は、大宇宙とも一つとなる。大自然とも一つとなる。神・キリスト、一切のものと一つとなる。「一つだ」と言ったって、対象的に言っているのではない。「一つとなる」ということです。無の世界に本当に入れられると、もう、一如の世界で、大宇宙と一つになる。神さまと一つになる。キリストと一つになる。信仰はもちろん一つだ。愛も一つだ。中心はみな神・キリストの他にない。そういう「一」ですよ、「無一」というのは。

エペソ書の中で一番大事なのは、この4章かも知れないな。3章14節から4章6節が、エペソ書の中心といつてもいい。

「無一」はまた、「無限無量」の世界です。「無限無量」ということは「完成」よりも素晴らしい言葉です。私は「完成」という言葉はあまり好きじゃない。人間が地上で人間のすることを完成なんて言ったら、とんでもない。私は詩が終わっても、「完成」と言いたくない。

「この詩は未完成でございます、但し、無限であります。無限性を持っています」と。無限無量性を持ってないものは本ものでない。時間的には永遠だよ、永遠性です。

私の詩(『霊界の星々』1998刊)は12,000〜13,000行と思っていたけれども、もう大体、5,000行書いてしまった。自分で驚いている。これでは、大変だな、20,000行位になつてしまふかな。世界最長の詩になつてしまふ。あなた方、信じられないだろ。詩を書こうと最初に思ったのは、今から30年位前だ。何も、それから一生懸命で準備したんじゃないけれども。大体、中学時代から私は詩が好きだった、漢詩も読んでいたし。小説はあまり読まない。本当に書き出したのは、1988年からだ。あの最後の夏の集会の後から。私は、詩を書いている時には、もう地上にいない。何か知らんけれども別な空間にいる。いや、この霊的な気迫は表現できない。それはもう、2000年を突破します、この未完成交響楽がで上がるまでには、でき損ないがで上がるまでには。「でき損ない」でいいんだよ。

「小池先生は立派なものを書いた」

なんて言うな、

「でき損ないを書いた」

と言ってくれ。

どうせそのうちに人類は滅びるでしょう。地球もおかしくなるでしょう。その時にあなた方は霊界の人物となつて、霊界で楽しく歌ったり語ったり——夢じゃないよ、これは——それが本当の現実です。魂はそういう処で——いかなるものもこの魂の世界を突き破るわけにいかない。魂も、パウロが言っている通り、ちゃんと霊体を、霊的な身体をもっていますから。そこまで烈々たるキリストの生命の世界に入らなかつたら、つまらないですよ。神・キリストと一つになるために十字架でもって無にされているから、自我がないから、「一つ」というのは、「一如」の現実にあるということ。



「神さまは一つだ」

と、こつち側で見てたつてしようがない。「神さまは一つ」なる、「一つなるキリスト」に、一如の世界に入ってしまう。霊なるキリストの中に。これが宗教的「神秘」の世界です。そういう世界に入らなければ、人間の魂はどうにもならないようにできているんだ。最高最深のものを、最上なるものを受けとるようにできているのに、それをみんな遠慮しているんだから、勿体ないはなしだ。自分で頭で考えて、

「そんなことがあるか」

なんてやっているから。そんな頭で考えている世界ではない。だから、「無一」は、別な言葉でいうと、「無限無量」ということです。この「一」は「無限無量」のものをもっている。この「一」は「1、2、3、4」の「1」ではない。ギリシヤ語でいうと、きつきの「一即多」は「ヘン・パンタ」という。「一」は「ヘン」、「多、すべて」は「パンタ」という。

●絶対の世界

7我等はキリストの賜物の量に随いて、おのおの恩恵を賜わたりたり。⁸されば云えることあり『かれ高きところに昇りしとき、多くの虜をひきい、人々に賜物を賜えり』と。⁹既に昇りしと云えば、まず地の低き処まで降りしにあらずや。

キリストが陰府にまで下つて、そして、全部これを贖い取ろうとした。いや、大変なひとだ。旧約では、「陰府」というのがある。人が死ぬと、みんな陰府の世界に行く。

「そんなものは引き上げてしまうぞ」

と。光のキリストが陰府の中に入つて行つたから、みんなびつくりしたろうね。

10降りし者は即ち万の物に満たん為に、もろもろの天の上に昇りし者なり。

面白いことを言っているね、パウロは。さすがはパウロだ、その通り。地獄の中に囚われている奴も——ダンテの地獄は、もうそこから出られないけれども——キリストは地獄の奴でも、悔い改めれば、上へあげてやるくらいだ。それでも、キリストを拒んだら、おしまいです、これは。「第二の死」ということ。この10節は痛快な言葉だね。

11彼は或人を使徒とし、或人を預言者とし、或人を伝道者とし、或人を牧師・教師として与え給えり。

この場合の「預言者」は旧約の預言者ではない。いろいろの役割がある。

12これ聖徒を全うして職を行わせ、キリストの体を建て、¹³我等をしてみな信仰と神の子を知る知識とに一致せしめ、全き人、すなわちキリストの満ち足れるほどに至らせ、

キリストが充滿しているような人、これをパウロは「全き人」という。パウロはどんどん、そういうことを自分でもつて、示されて語っている。楽しいね。



14 また我等はもはや幼童^{わらべ}ならず、人の欺騙^{あざむきごと}と誘惑^{まどわし}の術^{てだて}たる悪巧^{わるたくみ}とより起くる様々の教の風に吹きまわされず、¹⁵ ただ愛をもて真^{まこと}を保ち、育ちて凡てのこと首^{かしら}なるキリストに達せん為なり。¹⁶ 彼を本^{もと}とし全身は凡ての節々の助けにて整い、かつ聯^{つらな}り、肢体おのおの量^{はかり}に應じて働くにより、その体成長^{からだ}し、自ら愛によりて建てらるるなり。

要するに、体に例えられているエクレシア、キリストの召団、教会、その血となつてい
るものは「愛」だと。

「血は即ち愛なり」

だ。もちろん、キリストの愛です。神・キリストの愛。

「私はキリストに愛されているでしょうか？」

ではないんだよ、皆さん。こちら側のいかに関わらず、一人一人をその人らしく、キリストは必ず愛しておられる。それに気が付けばいいだけのなし。

「キリストは、あの人は愛しているようだが、私への愛は少し薄いようだ」

なんて、そんなことはひとつもない。キリストは、皆それぞれその人らしく、その人に最もふさわしい愛し方をしておられる。比較はしない。人格の世界は、比較は要らない。すぐ「比較研究」するね、比較研究する世界は相対の世界です。絶対の世界は比較は要らない。一人一人が絶対にできているんだから。絶対の質をもっている。相対的存在でありながら、絶対の質をいただいているのが人格というものなんだ。

「でき損ない」なんてないんだ。「でき損ない」とか、「落ちこぼれ」とか、悪い言葉だね。一人一人の才能は、神さまはその人を特別に造られた。数学ができないからといって、「落ちこぼれ」でも何でもない。だから、みんな、「一つ」なんです。人間の中心は一つなんです。賜りたる才能も一つなんです。ある一つのものが中心になる。語学か、数学か、何でもいい、いろんなものがある。それが好きなんだ。そういう、いただいたものは必ず好きなんだ。

「好きこそものの上手^{じょうず}なれ」

と、その好きなことを打ち込んでやっていけば、その好きなことによつて、社会に尽くすことができるわけです。もう、文部省なんて止めたらいいいんだ、あんなのは。みな、それぞれ塾でいいんだよ。全部、塾でいい。

「どれだけなければ。資格があるのらないの」

ではない。みんな一人一人持っている実力でいけばいいんだ。

「はい、この事で私は社会に仕えます」

と。そういうような質の学校がたくさんあって、

「入りたい人は、ああ来なさい。中で鍛えてやる。それをやらなければ出ていったらいい」

と、それだけの話だ。



●新しき人

22 即ち汝ら誘惑の慾のために亡ぶべき前の動作に属ける旧き人を脱ぎすて、
23 心の霊を新たにし、24 真理より出づる義と聖とにて、神に象り造られたる新しき人を著るべきことなり。

はい、おっしゃるとおりです。「新しき人を著るべきことなり」ではないんだ、「キリストを着れば、新しき人になりましたね」

ということですよ。パウロの書翰を、私は勝手な訳し方をしてやろうかな。パウロの言い方はややっこしい。もう少し、簡単に言えるんだ。それは「訳」ではない、パウロの「意訳」だ。「新人」なんです、キリストを受けとった人は。我々は、この古びない「新人」ですよ。新しいものは古くなるが、古くならないんだ、この「新」は。「カイノス」なんだ。「ネオス」でない。本当の新しいのは古くならない。

「旧き人は脱ぎ捨てられました。相変わらず、旧き衣の切れ端は残っていますけれども、そんなものは問題にしません。新しき人になりました」

と。新しくされたんです、全部、受け身ですから。自分でなったのではない。キリストに新しい人に、新人にされてしまった、十字架の贖いと聖霊でもって。

27 悪魔に機会を得さすな。

あと、ゴタゴタ書いてある。30節に、

30 神の聖霊を憂いしむな、

ちゃんと祈っている。祈らないで勝手なことをやっていると、聖霊から外れてしまうから。けれども、肉体というのは素晴らしいものだね、無意識に空気を吸っているから。空気は要りません、なんてやってない。空気を吸わなければ心臓がおかしくなるからね。空気は、無意識に我々は眠っていても吸っている。

汝らは贖罪の日のために聖霊にて印せられたるなり。

もう「聖霊で印せられている」と、妙なことが書いてある。贖われたから聖霊で印せられたかと思ったら、「贖罪の日のために聖霊にて印られたり」と。どういうことですか。既に贖われているよな。けれども、本当の贖いは、信仰的現実でなくて、

「具体的に天的な現実の中に入って罪の世界から完全に抜けている」

そういう意味において、パウロはこの場合の「贖罪」という言葉を使っている。普通の贖罪と違う。

「完全救済のために聖霊に印せられた」

と。「完全救済」という意味だ、この場合の「贖罪」は。

●一如体認

32 互に仁慈と憐憫とあれ。キリストに在りて神の汝らを赦し給いしごとく汝



「**互いに救せ。**」

この32節のような救しをできない人は、本当は、十字架を受けとっていない。パウロの言う通り、この32節は大事な節です。すぐ

「あれがどうだこうだ」

と言って、人をけなしたり、マイナスに考える。過去の間違いやなんかも。

「そんなものは全部、私はキリストに赦されたから、問題にしません」

と、そういうところに本当に入っていれば、その人は本当に聖霊の人だ。聖霊の人でありながら、この赦しができないようでは、未だ本当の聖霊の人でない。これははつきりしている。その点で32節は非常に大事な節です。人を赦せないなんてのはダメなんです。だから、

「まだキリストに赦されていませんね。あなたはキリストに赦されているのに、人を赦せないようだったら」

と、逆に言ってみよう。

「**人を赦したる如く、我を赦したまえ**」

と、主の祈りにもあるじゃないですか。「赦す如く」ではない、「赦したる如く」だよ。完了で言っている。人を赦さなければ、あの祈りはきかれない。人の間違いを赦さなければ。

だから、愛の行為が最大の力です。感情ではない。それを、やったのがキリストだからね。地上においてもそれをしたし、天界に行っても、それをしている。大変なひとだ、イエスという霊止は。「本願の効力」というものです。

パウロが散々4章で言っている「一つ」という、その「一つ」のものと一如になることが、「二つ」を本当に受けとっていることになる、認識していることになる。だから、それを「体認」という。体で認識する。頭ではない。

「**信仰は一つ、バプテスマは一つ、キリストは一つ**」

は、体で認識する体認しなければ。体認すると、一如の世界に入る。それが、今日言っているところの、「無一」なんです。「無」とされている。根源現実で、罪無き者にされている。だから、本当にキリストと一つになれる。「無一」です。「無一物」ではない。「無一物無尽蔵」という言葉は、ある意味において、似た消息を言っているんだけど。無尽蔵、無限無量。「完成」ではない。「完全」という言葉は、私たちは、相対的人間は、本当は使えない。ギリシア語でも「プレローマ」というのは、「溢れてしょうがない」という言葉だけれども、「テロス」(完成)ではない。

それで、今日のお話は、お終いでないようなお終いだ。本当は、お終いはないんだよな。「始めなく、終りなし」

という言葉もあるけれども。楽しかったでしょ。それでは、お終いにします。福音というのは、楽しくなければしょうがないんだ。お説教ではないんだから。私は、もつともらしいお説教なんかしないんだ。

